

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	李 麗
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 児童雑誌『赤い鳥』と『児童世界』の比較研究——日中の児童出版美術の様態と機能——			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	溝淵 園子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	高永 茂
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	有元 伸子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	川島 優子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	元 琉球大学・教授	武藤	清吾
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、20 世紀前半の日中両国において、新たな児童観の下に誕生した児童雑誌の比較を通して、各々の児童出版美術の機能について考察するものである。日本児童文学史上の代表的、先駆的存在である児童文芸雑誌『赤い鳥』と、それを一つのモデルとして創刊された中国の児童雑誌『児童世界』を取り上げ、主に表紙絵、挿絵、口絵を図像解釈学の視点から分析し、両誌のビジュアル・イメージの特徴と変遷を辿る。本論文は、序論と結論を含む全 8 章から構成される。</p> <p>序章では、研究の背景、先行研究、問題提起、研究の目的と方法及び意義について述べる。</p> <p>第 2 章では、『赤い鳥』前期の「赤い鳥画集」の口絵と、後期の写真版の口絵に描かれた中国像を分析する。前期における「中国」は肯定的形象から否定的形象へと変化していき、後期では野蛮かつ未開の表象としての中国が形成されていることを論じる。</p> <p>第 3 章では、『児童世界』の口絵に描かれた日本イメージについて検討する。当初は肯定的なものであった近代的な日本像が、日中戦争の推移に伴い、弱体で残虐で醜悪な否定的形象へと変化し、口絵が児童への政治的プロパガンダの役割を果たしていたことを述べる。</p> <p>第 4 章では、両誌で活躍した日本の清水良雄と中国の許敦谷について、イギリスの絵本の黄金時代を代表するウォルター・クレイン (Walter Crane) の絵と比較しつつ、両者の絵における西洋美術の受容を中心に論じる。清水と許との間には直接的な影響関係がなくとも、クレインを媒介者とすることで、両者の絵の構図や主題に共通性が生まれたことを述べる。</p> <p>第 5 章では、両誌ともに表紙絵に少女が多く採用されたことに注目し、服装、靴、髪型の三つの側面から分析する。表紙絵の少女たちは、『赤い鳥』では憧れとしての近代女性の新たな身体モデルと価値観を読者に伝え、『児童世界』では〈伝統〉からの解放と女性の自立という主張を伝えると同時に、男女同権をめぐる政治的意味が付与されていったことを論じる。</p> <p>第 6 章では、両誌に訳載されたアンデルセン童話 <i>Den Lille Pige Med Svovlstikkerne</i> (マッチ売りの少女) を取り上げ、テキストを読む行為と絵を見る行為に着目し、物語における挿絵の意味づけを検討する。『赤い鳥』では、連続的に展開する挿絵は時間の流れを表し、視点の移動や場面転換に</p>			

よって新しい空間の表現となり、視覚的コミュニケーションを作り出すメディアとなっていることを述べる。『児童世界』では、挿絵はテキストで語られない情報を補足する機能を有し、言葉で語られることと絵で語られることとの線引きによって各々の表現の特性が引き出されていると論じる。

第7章では、両誌に訳載されたルイス・キャロルの童話 *Alice's Adventures in Wonderland* (不思議の国のアリス) の挿絵の機能を分析する。『赤い鳥』の場合は作品の空白を埋める効果を持ち、『児童世界』の場合はファンタジーの雰囲気作りや異文化の紹介という役割を持つこと等を述べる。

結章では、論文全体を総括した上で残された課題を挙げ、今後の研究の展望を説明する。

本論文は、『赤い鳥』と『児童世界』の児童出版美術を芸術表現の一ジャンルとして、1910年代末から1930年代にかけての日中児童文化史に実証的に位置づけようとした雑誌メディア研究である。検証の厳密さに一部修正すべき点を残すが、両誌に関する先行研究への目配り、地道な調査、児童雑誌と美術との関係という研究蓄積の少ない分野への挑戦、東アジア児童文化圏への議論の広がり、ジェンダー研究やポストコロニアル理論への発展性の点で高く評価できる。『赤い鳥』研究の新たな段階を示唆する優れた論考である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)